

金山巨石群

縄文時代（紀元前 10,000～300 年）に現在の金山地区で暮らしていた古代人たちは、巨大な岩を使って季節や年月を追っていたのかもしれません。金山巨石群として知られるこれらの岩の集まりには、互いにいくらかの距離を置いて立つ 3 つの異なる岩組み（岩屋岩陰、線刻、東の山）が含まれます。巨石群は下呂の温泉地区から西に車で 30 分の場所にあります。

地元の研究者たちは巨石の分布と互いの距離、および岩に刻まれた印に基づいて、それらが一種の巨大な太陽暦として機能していたと推測しています。それらの岩を使って 1 年の異なる時期に太陽の光の筋が岩の上に落ちる様子を観察することで、暦を管理する人たちは季節を追いかけて、夏至・冬至や春分・秋分のタイミングを判断できていたのかもしれません。

このエリアからは約 8,000 年前の住居や道具の遺物が見つかることから、研究者たちは金山の古代の住民たちが意図的にここに巨石群を置き、時を追いかけていたという理論を導きました。

考古学、地質学、天文学の研究を組み合わせる天文考古学の分野でこの理論の決定的証拠はまだ確立されていませんが、それでも金山巨石群は、下呂からのエキサイティングで示唆に富む小旅行の目的地になっています。金山巨石群リサーチセンター & GALLERY では、巨石群のガイドツアーを提供しています。